



ヘーゲル『精神現象学』の成立過程の研究

栗原, 隆

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

1984-03-31

(Date of Publication)

2008-11-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲0467

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1000467>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・（本籍）	栗原隆（新潟県）
学位の種類	学術博士
学位記番号	学博い第37号
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
学位授与の日付	昭和59年3月31日
学位論文題目	ヘーゲル『精神現象学』の成立過程の研究

審査委員	主査教授	清水正徳		
	教授	田口寛治	教授	井上庄七
	教授	大河内了義	教授	向井守

論文内容の要旨

本論文「ヘーゲル『精神現象学』の成立過程の研究」は、若きヘーゲルがカント、フィヒテ、ヤコビ、シュルツェなどの哲学者と批判的に対決し、その長所を摂取し、そして独自の哲学体系を確立するにいたるイエーナ時代に焦点をあてて、彼の哲学の発展過程を体系的かつ歴史的に考察したものである。

まず序論「自然と実体」では、十九世紀初頭のドイツの代表的な哲学者や文学者たちが集まり、ドイツ精神の第二の首都とうたわれたイエーナが、ヘーゲル哲学の確立に決定的な意義を持っていたことが指摘され、イエーナ時代にいたるまでのヘーゲルの思想の歩みが回顧される。第一節では、人間を抑圧する客体的実定的なキリスト教に対してギリシャ的な美しき自然にもとづいた主体的宗教の理想を対置させたベルン時代のヘーゲルが回顧され、人間の主体的自由の回復という彼の哲学を貫くライトモチーフが析出される。第二節では、フランクフルト時代においてヘーゲルはこの理想を「美しき魂」たるイエスに託して実現しようとするが、「運命」との対決過程においてイエスは敗れ、ついにヘーゲルが理想の実現を哲学のうちに求める経緯が示される。第三節では、ヘーゲルのイエーナ時代が前期と後期との二期に分けて大きく概観される。前期はヘーゲルが友人のシェリングと共に『批判的雑誌』を刊行し、当時の有力な哲学者たちに辛辣な批判を浴せつつ、その優れたものを摂取した時期であり、後期は講義において哲学体系の形成に専念し、ついに『精神現象学』を完成し、もってカントに始まる哲学革命を完了せしめた時期である。本論文は四つの章からなるが、第一章と第二章とは主として前期を、第三章と第四章とは主として後期をその研究対象としている。

第一章「懐疑と否定」では、ヘーゲルが『懐疑論論文』においてシュルツェの懐疑論を批判しつつ、それを彼の弁証法の核心をなす有限者の自己否定の論理として摂取しようとしたことが論じられる。第一節では、古代の懐疑論とシュルツェの懐疑論が比較され、意識の事実のうちに認識の確実性を見出した後者は首尾一貫せず、本来の懐疑論を逸脱しているがために、主観主義や二元論に陥っていることが、ヘーゲルに即して明らかにされる。第二節では、ヘーゲルが古代のアイネスシデモスの十箇条のトロポイやアグリッパの五箇条のトロポイを分析し、相矛盾する命題が同等の権利をもって主張される二律背反を提起する点において懐疑論を理性的と見なしたことが述べられる。第三節ではカントとヘーゲルとの二律背反論が比較され、ヘーゲルはすでにフランクフルト時代からカントにおいて決して統一されることのない二律背反を生という概念を基盤にして合一し、克服しようとしていたことが指摘され、さらにこの独特の論理は彼の友人のヘルダーリンも共有していたことが述べられる。第四節では、本来の懐疑論は一切のことを否定するニヒリズムに陥いるに対して、ヘーゲルの懐疑論は規定的な否定であって積極的な認識を生ぜしめると説かれ、そしてこのように解された懐疑論は『精神現象学』の方法となることが指摘される。

第二章「無化と構成」では、ヘーゲルが『信と知』において哲学の内部に信仰と知識との対立を宿しているカントやヤコービやフィヒテなどの二元論的反省哲学と対決する過程において、彼の弁証法の重要な契機である有限性の無化の思想が成立したことが論じられ、その構造が明らかにされる。第一節では、ヤコービとヘーゲルとの信仰の概念が比較され、ヤコービにあっては信仰は対立の意識に囚われており、真理は学問外的なsalto mortale によってのみ啓示されるに対して、ヘーゲルにあっては信仰において主観性は完全に焼きつくされ、有限性は絶対的に否定されるということが明らかにされる。第二節では、このいわゆる全一者への帰入の論理はすでにフランクフルト時代、ヘルダーリンに触発されることによって成立しており、シェリングはこれに対して批判的な立場をとっていたことが論じられる。第三節では、ヘーゲルはカントやフィヒテと批判的に対決して、有限と無限の対立を克服した真無限を主張し、さらに真理を把握するにあたってシェリングのようにたんに直観によらず、カント的ないしフィヒテ的反省をも受容したということが説かれる。第四節では、ヘーゲルの哲学的課題は意識において絶対者を構成することであったが、このことは究極的には信仰によってではなく、いわんや反省哲学によってではなく、彼独特の思弁哲学によって達成されると主張される。

第三章「犠牲と承認」では、ヘーゲルの共同論の展開を追跡することを通じて、彼の社会哲学の根底にある犠牲、すなわち有限者の自己否定の思想構造が解明される。第一節では、ヘーゲルがベルン時代に政治的理想とした自由な共同にもとづく共和国は、個人の私的権利を全面的に放棄し、公共的なもののために生きるという犠牲によって成立することが明らかにされ、この思想に対するルソーの『社会契約論』の影響が論じられる。第二節では、ルソーの一般意志説のカントとヘーゲルへの影響の相違が明らかにされ、さらにフランクフルト時代においてヘーゲルが共和国の理想の実現不可能を認識し、私有を運命として受け容れ、ついに市民社会を国家のうちに位置づけるにいたる過程が叙述される。第三節では、まずフィヒテとヘーゲルとの自由論の相違が論じられ、フィヒテにおいては社会的自由は個人間の自己制限によって成立するに対して、ヘーゲルにおいては人間と人間の最高の共

同は最高の自由であると見なされると説かれる。さらに国家における市民社会の承認が「人倫的なものの悲劇」という言葉で表現され、ついに私的権利と公的権利の相互犠牲という思想が成立したことが論じられる。第四節では、ヘーゲルが『実在哲学Ⅱ』において個人の自由の全面放棄でなく、制限を求める点でフィヒテと同じ地平に立つことが明らかにされると同時に、彼が近代社会においてはたんに内面的な自由が保証されるにすぎないことを認識し、現実の政治のかなたに絶対的精神を樹立するにいたる経過が明らかにされる。

第四章「意識と経験」では、ヘーゲルはイエーナ前期には意識を哲学的根本原理とする哲学者たちを批判していたにもかかわらず、後期には意識論を受容し、ついにはこれにもとづいて『精神現象学』別名『意識の経験の学』を書くにいたる経緯が叙述される。第一節では、意識の事実の確実性を根本原理としたシュルツェ、クルーク、ブーテルヴェークに対するイエーナ前期のヘーゲルの批判が取扱われ、そしてブーテルヴェークにおいては対象意識と自己意識とを一つの意識においてどう捉えるかという重要な謎が提起されていることが指摘される。第二節では、ドイツ観念論の展開にとっての意識律の重要な意義が解明される。カントの体系的不備を是正するためにラインホルトは意識律を提唱するが、これをめぐってシュルツェとフィヒテとの論争が起こり、この論争を機縁にしてフィヒテの知識学が成立したことが叙述されている。第三節では、ラインホルトもフィヒテもともに、正当と前提された第一命題を展開するなかでさらにその正当性を確認するという循環を、人間精神の必然的な活動様式とし認めており、そしてヘーゲルも『精神現象学』においてこの循環を引き受けざるをえなかったことが、論じられる。第四節では、ヘーゲルがイエーナ後期の『実在哲学Ⅰ』において哲学知を構成する第一原理を意識に求めはじめ、『精神現象学』で対象意識と自己意識の対立をふくんだ意識において絶対者を構成する哲学を確立したことが述べられ、ヘーゲル哲学こそはドイツ観念論の極みであると指摘される。

「結語」では、イエーナ時代のヘーゲルの哲学体系構想の変化の跡が辿られ、彼は前期では哲学の予備学を論理学のうちに求めていたのであるが、後期では意識論を受容したがために、『精神現象学』のうちにそれを見出すにいたったことが述べられ、そして『精神現象学』こそはヘーゲルが若き日のあまたの苦悩や悔恨や痛憤を体系的に想起しつつ樹立した青春の記念碑であったと結論づけられる。

論文審査の結果の要旨

今世紀のはじめディルタイがベルリンの図書館に眠っていた未刊行の手記にもとづいて『ヘーゲルの青年時代』を著わし、若きヘーゲルの思想的苦闘の姿を生々しく書き出したとき、ヘーゲル研究の新しい時代がひらかれた。しかし彼の研究はフランクフルト時代までにとどまっていた。その後いくつかの手記が刊行され、これにもとづき『精神現象学』の成立にいたるまでのヘーゲルの発展過程をたどったルカーチの『若きヘーゲル』は、戦後のヘーゲル研究の軌道を決定した。本論文もこのような研究の潮流のうちにある。

わが国においてもルカーチの圧倒的な影響のもとに、若きヘーゲルの研究が進められた。しかしフ

ランクフルト時代や『精神現象学』については盛んに研究が行われているが、この両者を結ぶイエーナ時代については専門のヘーゲル研究者でもそれを敬して遠ざけるという傾向があり、まとまった本格的研究はいまだなされていない。それは、思想的混沌のさなかにあって自己の哲学体系を模索しつつあったヘーゲルの論文や手記が、思想的にも語学的にも異常なまでに難解であることに起因する。本論文提出者はこの困難によく打ち克ち、すぐれた成果をあげている。イエーナ時代の手に入るかぎりのすべての論文・手記・手紙だけでなく断簡零墨にいたるまで博搜して読みこなし、ヘーゲルの哲学的苦闘の跡を歴史的かつ体系的に再現することに成功している。そればかりでなく、本論文提出者はラインホルトやヤコービやフィヒテ、さらには今日では全く忘れられているクルークやプーテルヴェークらに対するヘーゲルの批判をそのまま鵜呑みにすることなく、最近刊行された叢書Aetas Kantianaによって彼らの原典にあたって精力的に読み、批判する側に対しても批判される側に対しても公平な目をもって取扱っている。これはこれまでの我が国のヘーゲル研究において見られなかった新しい研究態度である。

論文提出者はこのことによって、ドイツ観念論の大きなうねりのなかでヘーゲルの『精神現象学』が占める位置について創意に富む研究を行った。ラインホルトの意識律をめぐるシュルツェとフィヒテとの論争、これによる知識学の成立、さらにヘーゲルの意識律の受容による『精神現象学』の成立という過程を克明に解明することによって、従来のわが国のドイツ観念論研究には見られない新しい研究方向を拓いたといえる。

最後に、論文提出者はたんに当時の哲学者たちの思想的連関を追究しているだけでなく、シラー、シュレーゲル、ヘルダーリンなどの文学者などもその視野のうちにおさめており、本論文は学際的研究としても特筆されるべきである。

以上の理由により、審査委員は、論文提出者 栗原 隆が学術博士の学位を授与されるに十分な資格を有するものと判定する。